

氏名（本籍）	鈴木 敦（三重県）
学位の種類	博士（体育科学）
学位記番号	博甲第 6994 号
学位授与年月日	平成26年 3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	受傷アスリートのリハビリテーション専心性に対する ソーシャルサポートの影響

主査	筑波大学教授	博士（体育科学）	中込四郎
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	坂入洋右
副査	筑波大学教授		岡出美則
副査	筑波大学准教授	博士（心理学）	湯川進太郎

論文の内容の要旨

1. 論文の目的

本論文では、受傷アスリートがリハビリテーション過程において希求するソーシャルサポートの内容について検討し、さらに受傷アスリートが享受するソーシャルサポートがリハビリテーション専心性の向上にいかに関与するかを明らかにすることを目的とした。そして、この目的を達成するために4つの下位検討課題を設定した。

2. 論文の概要

各検討課題にそって本論文の概要を述べる。

1) 受傷アスリートのリハビリテーション過程におけるソーシャルサポート希求の変容
3段階の仮設状況（受傷段階、リハビリ一回復段階、復帰段階）を設定し、それぞれの段階で受傷アスリートがどのようなサポート提供者から、どのようなサポート内容を希求しているのかについて、457名の大学生アスリートに質問紙調査を行った。その結果、父や母といったサポート提供者へのサポート希求度は受傷から復帰までの間で段階的に減少し、復帰段階でのコーチやトレーナーに対する希求度が増加した。また、チームメイトへのサポート希求は、受傷段階と復帰段階に増加した。さらに、サポート内容に関しては、慰め、物質的支援、実践的支援等が時間経過とともに希求度を減少させ、評価や技術的助言は復帰段階に高い希求度を示した。

2) 受傷アスリートのソーシャルサポート享受による傷害受容と心理的变化への影響
ソーシャルサポートとリハビリ専心性の間に、スポーツ傷害の受容と気づきといった2つの心理要因の介在を想定し、受傷経験のあるアスリート3名の調査面接事例と二次資料（受傷経験を詳細に記述したプロアスリートの自伝図書）による1名の事例を分析資料とした。その結果、ソーシャルサポート享受からリハビリに専心するまでに、スポーツ傷害の受容の深まりと同期して、3つの気づき（自己の身体への気づき、競技することの意味への気づき、他者への気づき）が見られることを明らかにした。

3) 受傷アスリートのリハビリ専心性へのソーシャルサポートの効果

検討課題2で得られた知見をもとに質問紙を作成し、共分散構造分析を用いて、受容と気づきのどちらの心理要因がリハビリ専心性に促進的に働くのかを数量的に検討した。受傷時の状況を詳細に思い出せると回答した414名の大学生アスリートに対して質問紙調査を実施した結果、ソーシャルサポート享受によるリハビリ専心性の向上をもたらすまでの心理要因として、スポーツ傷害の受容よりも気づきを介在変数とした方が適合度の高いことが明らかになった。この結果から、ソーシャルサポート享受によって自己や他者、競技に対する気づきをもたらされ、リハビリ専心性を促進させていると考えられた。

4) 相談事例における受傷アスリートのソーシャルサポート享受による対処行動の変容過程

ここでは中込(2004)が報告した、慢性的な腰痛を訴え、それが引き金となって競技意欲の低下を訴え来談した受傷アスリートの心理相談記録を分析資料とし、ソーシャルサポート享受による対処行動の変容過程を分析、検討した。その結果、相談過程において、享受するソーシャルサポートの提供者は、高校時代の友人(旧環境)から徐々にサポートの得られやすい身近な他者(新環境)に移行していった。そして、このようなサポート提供者の変化と同期して、痛みの訴えの軽減や対処行動の積極的な変化が認められた。また、こうした変化の背景には、自己・他者への気づきの高まりが認められた。

上述の検討課題の結果から次のような結論が導かれた。(1)受傷直後は、受傷によって影響される日常生活への援助、復帰前は競技に直接関係する援助が希求され、特に身近な他者からの援助が求められる。(2)受傷アスリートがソーシャルサポートを享受することによって自己の身体への気づき、競技することの意味への気づき、他者への気づきといった自己や他者に対する気づきをもたらされ、それらがリハビリテーションの専心性を促進させている。

審査の結果の要旨

批評

本論文では、設定した研究課題に対して、質問紙調査、調査面接、そして心理相談事例と、多側面からのアプローチがなされている。受傷後のソーシャルサポート希求について、時系列的な変容に注目したところは、これまででない視点と言え、そこで得られた知見は、現場でのソーシャルサポートの活用に対して、有益な知見を提示することになった。そして、本論文の結論である自己・他者、そして競技することの意味への気づきが、受傷アスリートに対するソーシャルサポートの効果機序として位置づけられる、との主張は新たな見解であると評価できる。今後はさらに、受傷アスリートのソーシャルサポート環境への働きかけ(介入)を通して、ソーシャルサポートとリハビリ専心性や傷害受容との因果的関係をより明確にすることが課題と考えられる。

平成25年1月6日、博士(体育科学)学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員によって合格と判定された。

よって、著者は博士(体育科学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。